新・農業経営者ルポ／第90回

英国人農業経営者流 農業と人生の楽しみ方



英国人農業経営者流 農業と人生の楽しみ方

自給率向上という名目による農業保護、そしてEC、EU誕生にともなう農産物自由化……。第二次世界大戦以降、英国は目まぐるしく農業政策が変わってきた。だが、この厳しい荒波の中を、ちょっとした発想の転換と決断する勇気で乗り越えてきた経営者がいた。〝英国の果樹園〟〝庭園〟と呼ばれ、果樹やジャガイモ生産が盛んなケント州カンタベリーにおいてタマネギで活路を開いた男の半生を追った。

取材・文・撮影／大田朋子

英国の首都、ロンドンから2時間ほど南東にドライブすると、のどかな田園風景が見えてくる。そこは同国産果樹のうち46%が生産されるケント州だ。〝英国の果樹園〟とも呼ばれるこの地で、ほとんど栽培されることがなかったタマネギに着目し、さらにブランド化によって成功を手にしたファーマーがいる。デイビット・ボッティング（71）がその人だ。

デイビットの農場である、DM Botting Partnershipは英国国教会の総本山として知られるケント州カンタベリー郊外にある。タマネギと小麦を主品目とし、輪作用品目としてナタネ、サヤエンドウ、大豆、飼料豆、ジャガイモなどを栽培している。収穫期などの忙しい時期にはパートが数人加わるが、通常はデイビット、二男のガイ、従業員2人だ。1120エーカー（約453ha）という規模や数々の大きな農業機械などの存在感に比べて、働く人数が少ないことに驚く。

識字障害を持った青年が21歳で経営者になる

1940年、デイビットはイングランド南西部イースト・サセックスで生まれた。父・ラルフはジャガイモや小麦、さらに羊や乳牛を飼育する複合経営をしていた。30人ほどの従業員を雇い、農産物は地域のファーマーズマーケットに売っていたという。

「世界恐慌の際には、父は生き残るために七面鳥を飼って売ったそうだ。我が家は七面鳥で救われたことになるね」と、彼は語り継がれた逸話を教えてくれた。

子どもの頃から農地での収穫や栽培の作業に加わったり、乳牛の乳しぼりをしたり、土地の耕し方を学んだりといった手伝いをしていたデイビットだったが、実は生まれながらにしてハンディキャップを持っていた。ディスレクシア（識字障害）。これは、知的能力及び一般的な理解能力などに特に異常がないにもかかわらず、アルファベットのDとB、あるいはGとCなどの区別が付かないなど、文字の読み書き学習に著しい困難を抱えるという障害だ。

デイビットは16歳までボーディングスクール（寄宿制中等教育学校）に通った。しかし、この障害ゆえに、義務教育終了後の統一試験で単位が一つしか取れず、その時点で学校を辞めて家業の農業に専念することに決めた。当時は識字障害についての研究はまだ進んでおらず、字が読めない彼はただのバカだと思われていた。社会的に識字障害への認知がなかった時代、しかも今も昔もエリート人材輩出機関であるボーディングスクールにいた。落ちこぼれ意識が植え付けられてもおかしくない環境だったはずだが、デイビットには自分への卑下や周りへのひがみなどは全く感じることがなかったらしい。

「9歳まで字が読めなかったしね」とあっさり言ってのけるのだ。

家に戻り父の手伝いを始めたデイビットは、農作業に加えて次第に経営にも関わり始めた。働き者で勘がいい彼の働きに安心したのか、21歳の時に父から「これからはファームを一切お前に任す」と言い渡された。完全にリタイアしたわけではなかったが、実際の責任者はデイビットになった。



DM Botting Partnership 代表

デイビット・ボッティング

David Botting

英国／ケント州カンタベリー

1940年英国イーストサセックス生まれ。ボーディングスクール（寄宿制中等教育学校）中退後、家業の農業に従事し21歳で経営を継承。69年ケント州カンタベリーに移り、71年DM Botting Partnershipを設立。主要品目はタマネギと小麦。農場規模1,120エーカー（約453ha）。2011年の作付内訳は小麦650エーカー（約263ha）、タマネギ70エーカー（約28ha）、ほか輪作品目としてナタネ250エーカー（約102ha）、大豆等150エーカー（約60ha）。

「自分にとってはすべてが自然な流れでのことだったし、それまでしていたことの継続だったから経営者になったとはいっても、特別に興奮も不安もなかったよ」

一世一代の決断 サセックスからケントへ

67年に結婚し翌年長男が生まれた。その2年後、生まれ育ったサセックスから現在ケント州カンタベリー郊外に引っ越した。どうしてカンタベリーに移ったのか？　返ってきた答えは、極めてシンプルなものだった。

「もっと大きな規模でやりたかったんだよ」

サセックスの農場周辺では規模拡大のための農地の確保が困難だった。また60年代から70年代にかけては英国政府が農業者保護のため、通常よりもかなり安いレートで農地を借りられるようにし、さらにその農地はその後3世代までは契約内容の変更なしに借り続ける権利があるとの法律が制定されていた。そんなこともあって、移転を決意したのだった。移転先を決めるまで英国全土で100以上の農地を見て回ったというから、彼の野心と行動力がうかがえる。また、口にはしなかったが「父親の影響から離れた場所で」という思いもあったのかもしれない。

まずは300エーカー（約121ha）を借地することで、新天地での農業経営は始まった。当初はサセックスの農場も継続しており、車で2時間の距離を行き来した。大きな農業機械などは両方の農場で共有していた。そして70年には現在の620エーカー（約251ha）の農地を、その持ち主である英国国教会から借りることができた。このことがきっかけとなって、デイビットの農業経営の舞台は本格的にカンタベリーに移っていった。

カンタベリーに来てからの8年間は、サセックスと同じようにジャガイモや葉菜類、ニンジン、小麦など多種多品目の農作物を生産し、150頭もの乳牛も飼育していた。だが、主要作物だったジャガイモの出来が散々だった時期が長らく続いた。悪天候だったこともあるが、基本的に土との付き合い方が間違っていると考えた。

「サセックスの土は重くて粘土質。でもここの土は軽い上、もともと海だったところで石灰質が多い。土質が全く違うんだ」

それに周辺ではジャガイモを栽培する農家はたくさんいたが、他のジャガイモと差別化ができていたわけでもなかった。加えて、乳牛は労力











1タマネギの収穫風景。1年で最も忙しい収穫時期である夏は朝4時過ぎから夜10時前まで明るく、太陽が出ている間はずっと農作業をしている。2 3農場を空から「目」で見て判断したいと収穫時期の前にヘリコプターをチャーターする。4倉庫のバックヤードも日本では考えられないぐらい広々。5数年前からトラクタ、ハーベスタ類には全て衛星情報受信機を取り付けた。GPSよりも細部までガイドされるという。

英国人農業経営者流 農業と人生の楽しみ方









6選別作業にはパートも3～4人加わる。パブ仲間や隣人の息子たちもパートに来てくれる。彼らは昔からの顔なじみでもある。7次年度に向けタマネギの播種作業を行なうデイビットとガイ。プラウ耕や施肥設計など農場のケアはアドバイザーのリチャードと相談して決めている。8DM Bottingの主力商品のタマネギのブランドのロゴマーク。数あるスペイン語の単語の中でも「MATADOR」は、覚えやすくて耳にやさしいスペイン語との理由でデイビット本人が選んだ。9 2011年はタマネギの出来がよかったが、ほかの農家でも状況は同じだったために、取引価格は1tあたり70ポンドと低めだった。代わりに小麦は高値で取引されたとか。

がかかる割にほとんど儲けはなかった。「何か変えないといけない……」と模索し、もがいていた。

ちなみに、デイビット同様、70年代の英国も方向性を見失っていた時期でもあった。労働組合が強く、勤務は週3日だけ、意味のないストライキばかりが続いていた。政府も無駄にお金をばらまいていて、国際通貨基金（IMF）から忠告を受けたのもこの頃だ。79年にマーガレット・サッチャーが首相に就任し、国営企業の民営化を推進するなど改革を推進するまで英国の停滞は続いていたのだった。

米国行きがきっかけでタマネギ生産に挑戦

そして転機は訪れた。

70年代末、フロリダに住む友人を訪ねて米国へ行った時のことだ。3週間の滞在中、車を借りて米国内をドライブし現地の農家を訪ねまわった。別に知り合いがいたわけではない。車を走らせて農場を見つけては「英国から来た農家なんだが……」と、そこで作業している従業員や経営者に声をかけて現場を見せてもらい、話を聞いた。農業生産の現場を自分の目で見た時、デイビットは気付かされたのだった。

米国の農業経営者は効率のいい少品目に特化している！　と。

「米国の農場の規模は、私の農場よりも2～3倍広いのに栽培品目は4品目以下だ。私は彼らの3割しかない農地に5品目以上作っていて、その上乳牛まで飼っているんだから、儲からないのは当たり前だった」

米国から戻った80年、労力の割には利益がほとんどなかった乳牛部門を一切止め、全頭売り払った。農産物もそれまでの多品目ではなく、売り上げの大部分を占めるタマネギと小麦などの少品目に集中したのであった。

「それまではラズベリーを栽培していた時もあったしね。それほど多品種を扱って結果的に農業経営が散漫になっていたわけだけど、ずっとそれが普通できたから疑問にも思うことはなかった。何が自分の首を絞めていたか、米国に行ってようやく分かったんだ」

デイビットは語るが、今も変わらず当時から農場で働く従業員のアレックスは「ロンドンのファームショーで彼の乳牛が優勝したり栽培していたラズベリーで農業賞をもらったり、当時から一目置かれるファーマーだった」と言う。ただ本人にとっては、決定的な何かを変える必要があると感じていたのだろう。米国視察後、ジャガイモ栽培も

止めた。これも結果的によかった。というのも、当時ケントではイギリスの主食であるジャガイモを栽培する農家はたくさんいた。一方でタマネギを生産している農家はほとんどいなかった。市場ニーズについて確固とした理解ができてきた頃だった。

英国産なのにスペイン語？タマネギで成功した理由

80年から生産を始めたタマネギには"Matador"（マタドール。スペイン語で闘牛士の意味）という名が付けられている。その経緯が実に面白い。

もともとデイビットは自分の畑で収穫するタマネギの品質には自信があったが、どのようにして付加価値をつけていくべきか思案していた。そんな折、出荷先の業者を通してフランスの市場に向けてタマネギを売ろうしたところ、「フランスでは、英国産よりもスペイン産と思われた方が買ってもらいやすい」と言われたのだ。そういえば、実際に英国内でも、スペインの野菜がおいしいというイメージが定着していることにも気付いた。そこでデイビットはスペイン産をイメージさせる、Matadorという名を冠したのだった。このブランド戦略のおかげで、普通のタマネギよりも20％高い値段で取引されている。

また、84年にはこの地域では空調管理システム付きの貯蔵施設を設けた先駆者となった。もちろん、他の農業経営者がその価値を知らなかったわけではない。しかし、先行投資をしたのは、デイビットだけだった。

それまでは栽培してすぐに出荷していたのだが、貯蔵施設を建てたことによって出荷時期を選んで出荷できるようになった。市場相場を見ながら出荷できるようになったことで、ある程度までは自分たちで価格設定をコントロールできるようになったことが、今日の成功を手にした大きな要因といえる。

成功の秘訣はほかにもあるようだ。デイビットは金融コンサルタント、農業経営コンサルタント、そしてアグロミニスト（農学者）をアドバイザーとして雇っている。

「私だけの独走を防ぐためだ。外部のプロがチームにいると、私の限られた見方だけで独走するのを避けられるからね」

EUの農業保護政策を経営者としてどう見ているか

73年にEC（欧州共同体）に加盟して以来、英国の農業を語る上で避





10黄金の小麦が一面に広がる、8月の収穫前の風景。デイビットが現在耕す畑のうち半分は英国での最大の土地所有者である英国国教会から借りている。11クラースの汎用コンバイン。刈っているのはナタネ。12ジョン・ディアのトラクタ。衛星情報を受け取るアンテナが据え付けられている。13英国の農機メーカー、KRM社のマニュアスプレッダ。14バーダスタッドの鎮圧機。これらの農機をリーズナブルに購入するため現地に行くことが多い。







英国人農業経営者流 農業と人生の楽しみ方


18


15



16



19


17

15自宅のキッチンボードにはデイビットが大切にしている家族や友人からの手紙やポストカードが飾られてある。16農場の入口には石碑が。17趣味は釣りでメンバー制の釣り堀も経営している。農作業後は太公望になるのだ。18家族との夕食。夏休みには三男家族も遊びに来た。19二男のガイはオリジナルハムを製造・販売するブランドを立ち上げている。

けられない政策がある。共通農業政策（CAP）だ。直接支払いによる農民の生活水準の適正化と同時に消費者に良質な食品を公正価格で提供することを目的としているが、CAPは不効率な農業をしているフランスを英国が支えているだけで不公平だといった不満が英国内では強い。もちろんCAPのおかげで英国の農家には補償金が支給され、それがイギリスの自給率を大幅に上げた理由に挙げられる。しかし、デイビットはこう主張する。

「CAPでの補償金がなくてつぶれる農家は英国では15％にも満たない。それに補助金を受け取るために多くの書類を用意して非効率的な官僚主義の調査に付き合わなければならない。こんな制度に頼らずとも自分の農業を成り立たせるのが筋じゃないのか」

政策に左右されず独自の経営を貫いてきた彼らしい言葉を吐く。

一方、ECを経てEU（欧州連合）が誕生したことも経営にとっては追い風となった。デイビットの会社でも情報サービス会社と契約し、そこから提供される世界市場の現状やプライス情報を参考にすることで、戦略をきっちりと立て、出荷時期を決める姿勢が強くなっていったという。

人生は楽しむべきもの リタイアはまだ先の話

デイビットは71歳になるが、今のところ、すぐにリタイアしたいという気持ちはなさそうだ。具体的な作業などは後継者のガイに任せていきながらも、今後も自ら農業経営に関わっていたい思いがある。

「今の夢？　農閑期に大好きな旅行と釣りを続けていくことだな」

そして農業経営の何が好きなのか、農家でよかったところは？　との質問にデイビットは「インディペンデントな点、自分で決断を下す点、そして成功できる点」だと答えてくれた。

識字障害というハンディキャップを持つ彼にとって、農業は成功をもたらしてくれた天職であったのだった。そして、デイビットを通じて、ファーマーとはリッチな時間の使い方ができる自立した人たちなのだなとも感じさせられた。実際、彼の経営スタイルや生活スタイルは、筆者が農業や農家に抱いていたイメージを吹き飛ばすものだった。

デイビットの農業経営への情熱に触れていると、リタイアどころかもう一花咲かせそうな気さえした。

（本文中敬称略）